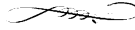

「個人と集団の良い関係」の特集にあたって



熊本大学
藤中隆久

本特集は、平成22年9月25日、熊本大学に於いて、日本人間性心理学会第29回大会の理事会企画シンポジウムとして開催されたものをもとに、編集されたものである。シンポジウムを企画した背景には、以下のような問題意識があった。すなわち、我々の学会では常に現実社会の問題にコミットしてゆく姿勢が問われているはずだが、それならば現代社会が抱えるある種の問題を、「個人と集団の関係」として、人間性心理学的に読み解くことはできないだろうか、また、そのような読解が可能であれば、人間性心理学はそれらの問題にどのような解を与えることができるのだろうか、という問題意識である。

現代社会の問題として、学校現場でのいじめにおける少数の当事者と多数の傍観者という構造、モンスターペアレンツの出現、医療現場における地域格差、モンスターペイシエントの出現、医師の立ち去り型サボタージュ、さらには格差社会、無縁社会、少子化社会などを取り上げたとき、その背後には「個人と集団の関係」があると考えられる。この両者の関係が昔と変わってきたことにより、これらの現代的問題は起こってきたと見立てても、そう大きくははずれてはいないであろう。

例えば、いじめの傍観者は、教室の一角で発生したいじめでも、自分には全く関係のない問

題であると思っている。自らが属する集団内にいじめが発生したのであれば、本来、自分にもその発生に関する責任の一端はあると考えても良いのではないだろうか。あるいは、自らが属する集団でいじめが進行しているのならば、それを止める責任の一端は、集団の構成員一人一人にもあり、それはとりもなおさずこの自分にもあると考えても良いのではないだろうか。ところが、現代の教室に集う多くの子どもたちは、そのようには考えなくなっていて、圧倒的多数の子どもが、少数の人間によって繰り返される目の前のいじめを傍観し、ゆえにいじめはエスカレートし、時には取り返しのでない事態まで発展したりもするのである。しかし、また、多くの子どもたちは、そのような事態になってもなお、いじめを起こした加害者及びそれを阻止する役割を果たせなかった教師にのみ、全責任があると考えているのであろう。しかし、これは、教室だけの問題ではない。現代の社会全体もそうなっているのである。むしろ、社会全体が私事化社会となったことに伴い、教室もそのようになったのだ、と見立てる方がより正確であると言えよう。

構成員の意識が私事化された集団においては、集団は、ただの多数の人の集まりという様相を呈し、集団が集団としての機能を果たし得なくなる。構成員の一人一人が、集団の構成員

としての責任を自覚すれば、集団機能が崩壊することはない。ところが、だからといって、構成員の意識を高め一人一人が集団維持に邁進することが良いかといえ、そういうことも単純には言えないのである。

集団の維持に重きが置かれすぎると、自らの主張や欲求や権利は抑え、集団の一員としての責任を果たすことばかりが要求されるような「滅私奉公」の価値観が支配的な集団となる。そのような価値観が支配的な集団は、個人にとっては息苦しい。その息苦しさを歴史的に経験してきた我々は、その苦しさを逃れるために個人の主張や欲求や権利を表現し実現することに重きを置くようになったのである。ところがやがてはそこに重きが置かれすぎようになり、現代では「滅公奉私」の価値観が支配的となり、ついには集団の維持も困難となってきている。つまり、「個人と集団の関係」を昔ながらの関係に戻せば、それらの問題が解決するのと言え、そうはうまくいかないことなのである。昔ながらの関係ではそこに生きる個人が息苦しいという問題があったからこそ、今の個人と集団の関係に変わってきたはずだからである。結局、どちらの価値観が支配的であっても、問題が生じ、個人が生きづらくなることに変わりはない。

そこで、「滅私奉公」でもない「滅公奉私」でもない、個人を生かしながら集団を維持するような両者の良い関係とはいかなるものなのか、あるいは、そのような関係を作ってゆくためにどうすればよいのかを、考えねばならないのである。本シンポジウムの趣旨は、上述したような現代社会の諸問題のそのような背景を読み解き、人間性心理学の俎上で議論したいということであった。

シンポジウムは3人のシンポジストが、それぞれの立場から発言し、その後指定討論者に議論を活性化してもらい、その後フロアとの質疑によって議論を深めていった。シンポジストの1人はこの企画の立案者である、藤中隆久（熊

本大学）である。まず、藤中が企画の趣旨を説明した。

続いて、佐々木英和（宇都宮大学）が、「自己実現論」をベースに個人と集団の関係について考察した。佐々木氏は、社会教育学者であり自己実現の研究者であると共に、地域作りに携わる実践家でもある。個人と集団の良い関係を考えるにあたって、自立した個人とは何かを考える必要があるが、その際に佐々木氏の自己実現論は、大きな手がかりとなると思われる。

その後、八ッ塚一郎（熊本大学）が、「グループダイナミクス」の観点から個人と集団の関係について考察した。八ッ塚氏は、集団心理学者であり、集団の研究においても常に個人の視点を持ちうる貴重な集団心理学者である。集団について考える際、集団そのものにだけに目を向けてしまえば、個人がそこにはなくなってしまふ。それでは、決して個人と集団の良い関係は構築され得ないであろう。従って、集団を理解しかつ個人への視点を持ちうる集団心理学者が、個人と集団の良い関係の議論には欠かせないと思われるのである。

3人のシンポジストの発表の後、指定討論者として村山正治（東亜大学大学院・関西大学客員教授 21世紀研究所主宰）に議論を活性化してもらった。村山氏は26回大会（於：仁愛大学）の理事会企画シンポジウムで、自らのエンカウンターグループの実践について発表されていた。そのグループがまさに、「個人と集団の良い関係」の実践のように筆者には感じられたのである。グループを進行してゆくにあたり、個人を犠牲にしてグループを成り立たせるわけではなく、個人個人を大切にしながら、なおかつ、グループの維持が実現され、個人はグループにいることの恩恵を受けるような実践であったといつて良い。今回のテーマに、最もふさわしい討論者として、どのようなコメントが返ってくるのかを期待して指定討論者をお願いした次第である。

本特集では、そのシンポジウムに基づき、3

人のシンポジストの立場で「個人と集団の良い関係」について考察したものである。

* * * * *

【現代社会の諸問題の見立て】

森田・清水（1994）は、いじめを「教室の病」と見立てた。いじめは、教室という集団の中で発生する現象であり、集団内では「被害者」「加害者」「観衆」「傍観者」の四層に子どもが分断されていて、いじめ問題の困難性は、傍観者が圧倒的多数である構造に帰されると説明される。しかし、現代の日本の教室で傍観者が多いのはなぜなのだろうか。

医療現場でも、医療者に無茶な要求をする患者、いわゆるモンスターペイシエントが増えてきているらしい。また、タクシー代わりに救急車を使用したり、風邪を引いても昼間には医者に行く時間がないからというだけの理由で、夜間の救急外来を受診したりする患者もいて、それらの人も、モンスターほどではないが非常識な人であるとは言えるであろう。地方と都市の医療格差も出現している。大学医学部の医局制度が機能していたころは、医局の権限で地方にも医師を派遣できていた。ところが、医局制度のある種の機能が解体され、専門医志向の現状にあって地方に行く医者が減り、地方の医療は危機的状況にある。そのような現場の状況に医師は疲弊し、いつの間にか、病院を立ち去る医者も増えている。なぜ、今、医療現場にこのような問題が起きてきているのだろうか。

また、現代は無縁社会と称される。一人暮らしをする人が増え、孤独死する人も増え、人々がつながりを失った社会になったということである。発達心理学領域でもトピック的に「ギャングエイジ」がなくなったと言われて久しいが、それも当然ではある。そもそもギャングエイジとは、地域社会内で自然発生的に作られた子ども集団の中で育まれるものだが、子ども集団が自然発生するような地域社会そのものが、現代

ではなくなってしまったのである。昔ながらの地域も近代化し、核家族化し、そこに暮らす人々のつながりがなくなったのである。核家族化よりもさらに事態が進んで、非婚化、少子化も現代社会の問題となってきている。

さて、今、ここで取り上げた現代社会の諸問題の背景には、現代人の意識が、「私事化（privatization）」されてきたことがあると指摘できるであろう。戦前の日本では、滅私奉公の価値観が共有され、それによって戦争も遂行されてきたわけである。滅私奉公とは、「私」のことよりも「公」のことを優先させる価値観である。戦前の日本にあっても、すすんで戦争に行きたいと願う人はあまりいなかったはずである。個人的感情としては多くの人が「戦争には行きたくない」と思っていたはずである。しかし、当時の日本は、「私は戦争には行きたくない」という「私」の感情を優先させることが許される社会ではなかった。「私」を優先させることが許される社会であれば、その社会で戦争遂行はできないであろう。戦前の多くの日本人は、行きたくないという「私」の感情よりも、「お国のため」という「公」を優先させる行動を選んだのである。しかし、その行動規範は、純粋な憂国意識によって選ばれていたものではないのかもしれない。個人的な感情を優先する行動を取れば、当時は非国民と非難される風潮があり、それを恐れて、個人的な感情を押し殺すような行動規範を選択したとも考えられる。だから、滅私奉公が支配的な価値をもつ集団に生きる個人は、自己犠牲を強いられるということだから当然苦しい。その苦しさの反省から、戦後はもっと「私」を優先して良いという価値観が支配的になってきた。それが「私事化社会」である。「私」の感情を優先させて良いということになれば、必然的に「公」の意識は希薄になる。それが進めば、「公」のために「私」を滅することなどナンセンスという感覚になり、他者とのつながりは、個人の感情を実現させることを制限するものであり、それはむしろ煩わし

いものにもなるだろう。意識の私事化とはそのような意味である。

したがって、教室という集団内の人的つながりも煩わしく、そのようなつながりは、自分の自由な行動を妨害する要因となると感じる子どもが増えたのであろう。そのような子どもが増えれば、教室は、自分には関係のない他人が多く存在するだけの場所となる。そのような場所にいる一人一人の子どもは、教室で何か問題が起こったとしても、それは、自分とは関係ない問題という意識になるであろう。だから、多くの傍観者にとって、いじめとは、自分とは関係のない他人が起こした、自分とは関係のない問題なのである。

医療現場のモンスターペイシエントや非常識な患者も、やはり、「私」の感情を優先させた行動を取っているにすぎない。医療制度とは公的な制度である。制度を維持するためには、多くの人が少しずつ「私」の感情を抑えた行動を取る必要がある。しかし、公的制度維持のために「私」を少しだけ抑えることよりも、今のこの「私」の感情を満たす方がずっと大事だと考える人が増えれば、非常識な振る舞いをする人も増え、その中からはモンスターも出現するであろう。(学校という公的制度に対して、過度のクレームをつけるモンスターペアレンツもまた同じ構造である。)また、昔の医局制度では、地方の病院に行くことを指示された医者は、例えそれが意に沿わぬ人事でも、あからさまに断ることはできなかった。しかし、「私」の感情が何はともあれ優先されるべきであるという価値観が支配的になれば、意に沿わぬ地方への赴任を断ることは、むしろ、支持されるべき生き方となる。そのような意識の変化により、都市部ばかりに医者が偏在する結果を招いている。

しかし、地域社会が崩壊したことも無縁社会の到来も、非婚化や少子化も実は多くの人が好んでその方向を目指した結果であるとも言える。網野(1996)によれば、村落に住む人々の一部では、無縁であることはあこがれであり、

そのあこがれで、都市を目指した人々も多く存在したとのことである。つまり、有縁社会や地域社会の人のつながりの煩わしさやしがらみから逃れたい人が、自ら無縁を求めて都市を形成したのである。

つまり、「公」よりも「私」を優先する価値観が優勢となって、このような問題も発生したわけだが、それは我々自身が自ら望んだ結果として、発生させた問題であるとも言えるのである。

【集団の機能】

「公」的な活動などには参加したくもない。「公」に自らの自由が束縛され、「私」の意思が制限されるなんてご免だから、「地域社会」などなくなっても自分は全く困らない。自分は自分がやりたいようにやる。人とのつながりは煩わしい。学校制度やいじめや医療制度の問題は、その担当者がいるはずで、担当者に責任があるのだから、その人たちで解決すべきである、自分とは関係ない。そのように考える個人が増えると、「公」や「集団」は成り立たなくなるであろう。そう考える人にとっては、集団の崩壊は、煩わしさから解放される歓迎すべき事態かもしれない。しかし、集団が崩壊すると、崩壊させた当事者にとっても、困った問題が起きてくる。

なぜなら、集団とは個人に変わってリスクを引き受けてくれる存在だからである。草食動物が群れを作るのも、肉食動物に襲われるリスクが、群れによって軽減されるからである。群れに属さない個体は、自らの才覚でリスクから身を守らねばならない。人間に於ける集団も同じである。

例えば、同好の士でサークルを作る目的は、そのサークルに属することにより何らかのメリットがあるからである。個人で手に入れるには大金を払わねばならない商品も、サークルのメンバーでお金を出し合えば、少額ですむ。個人で大金を払うというリスクを集団が引き受けて

くれたわけである。サークルのメンバーの誰かが入手した情報であれば、メンバー間でなら共有できる。全ての情報を自力で入手するリスクを集団が引き受けてくれたということである。

労働組合などは、個人に変わってリスクを引き受けてくれる存在として、わかりやすい例であろう。会社から解雇されるリスクは、組合という集団の存在によってかなり軽減されている。地域社会に生きることも、同様である。地域社会の中で自らの意思を持ったり自らの意思を通そうとしたりする主体性を持たない人には、滅私奉公の価値観が支配的な集団内にあることも、おそらく、さほど苦に感じないのではないだろうか。その集団の意思通りに振る舞っていることの方が、むしろ楽と感じているのではないだろうか。集団に埋没してしまえば、それはつまり集団が個人に変わって様々な「決定」のリスクを引き受けてくれているということなのであり、「自己決定」にまつわる様々なリスクを個人は取らなくてもよいということで、楽であろう。昔ながらの村落において、地域社会の一員としての行動を取る個人は、まずまず、大過なく人生を過ごすことができたはずである。地域社会の一員として過ごすという生き方を選択する人が多数派であれば、地域社会は維持される。個人的な能力が特に優れていなくても、そのような意識を持つこと自体が、集団維持に貢献していることになり、自らを守ってくれる集団内で生きることができる。

一番大きな規模の集団である国家は、その最たる存在である。我々が日常生活を不安なく安全に過ごせるのも、個人の能力が高いからではない。リスクを自らの能力で切り抜けるだけの才覚を、われわれ個人が持っているわけではない。国家が定めた法律によって、国家が所有する警察権力によって、国家の主権によって、国家が保証する通貨によって、我々は守られているのである。犯罪者から身を守る際に生じるリスク、他国にいるときのリスク、通貨を支払っても、「物質的にはただの紙切れだから」とい

う理由で商品と引き替えることを拒否されるリスク、これらのリスクは、全て国家が肩代わりしてくれているおかげで、我々はむやみに犯罪被害に遭うこともなく、他国を安全に旅行することもでき、通貨を使用すれば、拒否されることなく商品を受け取ることができるのである。一定のレベルの教育や医療が受けられるのも、国家の制度のおかげである。

ところが、国家のような公的な集団も、労働組合や地域社会のような中間集団も、同好サークルという私的な集団も、いずれのレベルにおいても集団が崩壊してしまえば、今までリスクを引き受けてくれていたものがなくなることを意味するわけだから、リスクを直接個人で引き受けなければならなくなる。個人を束縛する集団などない方がよい。自分の自由意思でやりたいことができる方がよい。他者との関わりは煩わしい。自分は自分のやりたいようにやる。そう考える人が増えれば集団は形成されえないが、降りかかるリスクは、全て個人で受けなければならない社会が出現するというのである。

一昔前までは大学が倒産するという事はまずなかった。大学は文部省の方針に従って設置された。ひとたび設置された大学は、文部省の基準を満たした大学として集団入りすることが許され、その集団内での規範に従った行動を取る限り、何とか倒産することは免れていた。これは「護送船団」方式と称されていた。ところが、大学設置基準が緩和され、「護送船団」がなくなった。集団がなくなれば、それぞれの大学は倒産のリスクを独自に引き受けざるをえなくなる。受験生という市場に選ばれない大学は退場しなければならなくなったのである。個々の大学がそれぞれに、市場競争に参入することを余儀なくされ、ホップスが述べるころの「万人の万人に対する闘争」をくり返しながら、倒産する大学も出現してきたのである。これを、個人と集団の例に置き換えると、集団が崩壊すれば、個人個人が競争状態に投げ出される。競

争が激化すれば、勝ち組、負け組が出現する。それが常態となれば格差社会の到来である。個人の意思に従って自由行動ができるようにするために、それを妨害する集団をなくすると、自らが直接危険にさらされることが常態化された事態を招くのである。

しかも、このような事態は、我々自らが望んで招いたのである。確かに、自らの自由な意思で行動したい人にとって、集団を維持するために「滅私奉公」を強制されることは苦痛である。集団の規範に従って安泰に生きてゆく生き方など、自己実現の妨げ以外の何ものでもないと感じる人は現代には多く存在するだろう。そのような人にとって、自分の意思で主体的に人生を生きたいと願うことは、肯定されるべき価値観ということになるだろう。しかしながら、そう願う人たちが集団にとどまらない行動を取れば、集団は弱体化し、その結果、市場原理の競争にさらされた個人個人が、自らリスクを取らねばならない事態となる。そのような事態は、結局、誰にとっても望ましいものではないだろう。

そこで、我々は、集団を維持する必要性を再び確認することになるのである。ただし、これは、相反する命題を同時に実現させねばならないことを意味している。滅私奉公を強制されて集団を維持させようとする人生は、集団内で自分の意思を押し殺して生きてゆく人生、そんな人生よりは自己を実現させる方が価値があると考える人、あるいは、単に「私」の感情を優先させたいと考える人は、その方略によって集団維持を目指そうとする集団からはいずれ逃走するであろう。その人数が増えれば、集団は維持され得ない。とすれば、滅私奉公を強制されず自己の意思が尊重された上でなお、集団が維持される、そんな集団を実現させる必要があるのだが、これはパラドックスを解くようなものである。

【パラドックスを解くヒント】

集団内での個人の意思を尊重しながら、なお

その集団を維持させ機能させる。このパラドックスを解くにあたって、ヒントになる考え方が多少ある。その一つが、古武道の身体操作である。現代武道と古武道では、型稽古のとらえ方に大きな違いがある。現代武道では、型は実践のシミュレーションであり、型稽古はあくまでも実践的な稽古の補助である。現代武道では型稽古だけで強くなることなどは想定されていないだろう。ところが、古武道では、型稽古を実践的な稽古の補助とは位置づけていないし、型を実践のシミュレーションとも位置づけていない。型稽古は理論そのものであり、型稽古のみが実践時の強さに到達する道なのである。型稽古が即ち実戦稽古である。古武道では、なぜ型稽古にそこまで大きな意義を付与するのだろうか。それは、古武道には現代武道にない独特の身体操作があり、その身体操作を身につけるためには、型稽古をするしかない、と考えられているからである。

古武道と現代武道の身体操作の一番大きな違いは、身体のある一点（主に関節部位、肘、膝、腰など）を軸として、その軸を中心にてこの原理によって、パワーやスピードを生み出す動きをするかしないかという点にある。現代武道では奨励されるこの原理を利用した身体操作が、古武道では否定されている。古武道では、中心軸や支点を使用せず、全身をまんべんなく調和させて使用する動きが奨励される。現代科学の視点からは、中心軸を持たないこの身体操作でスピードやパワーを出すことは、不可能であると結論づけられるのではないだろうか。事実、型の動きは、「軽く、柔らかく、浮いている」（黒田 2000）とか「ふにゃふにゃとしたとらえどころのない動き」（摩文仁 2001）と表現されるように、スピード感や力感は感じられない。空手の形競技において、このような動きをしているようでは、好成績などおぼつかないだろう。しかしこの古武道独特の身体操作は、現代武道の身体操作とも日常の身体操作とも異なるものなので、型稽古によって身につけるしかないの

である。

その身体操作を身につけるための型稽古では、意識の持ち方が非常に重要である。型として決められたとおりの動きをくり返すことにより、自然に型通りの動きができるようになるという意識で稽古をしてはいけない。学習心理学の練習の法則によれば、そのような意識で型の動きを何百回も何千回も練習して体に叩き込むことに、一定の成果が上がるであろう。しかし、その積み重ねで、勝手に型どおりの動きができるようになることが、型稽古の目的ではない。古武道では毎回の型稽古のたびに、今、ここで、身体の各部位が、どんな動きをしているのかを感じ取ろうとする意識が必要である。身体への内省が必要なのである。そのように意識を保ち、今、ここで感じている身体の各部位の動きを、全身の動きの流れの中に調和させようとする意識を持ち続けながら、型稽古をする必要がある。部分を感じ、感じられた部分を身体全体の中に位置づけていこうとする意識、つまり「今、ここ」の意識をもって型稽古をすることで、体験過程が促進され、非日常的な身体操作が身につくのである。このような身体操作こそが、「十分に機能する身体」ということになるのであろうが、「部分の動きを感じることを、それを全体の動きの流れに位置づけること」は、部分と全体の関係性の問題と捉えることもできる。つまり、古武道における部分と全体の関係は、現代武道の身体操作である、中軸により部分が全体の支配下に置かれているような関係ではなく、個々の部分をそれぞれ独立に動かしながら、全体との調和を図る関係である。この「十分に機能する身体」を手に入れるために、今、ここの意識を持って型稽古をするとも言えるであろう。このような古武道における型稽古の際の意識や、古武道の身体操作は、パラドックスを解くにあたっての大きなヒントになる。

パラドックスを解くためのヒントとして、桃山時代から江戸時代にかけて活躍した宗教者の

不干斎ハビアン生き方も参考になる。ハビアンという人は、はじめは禅に帰依していた。その後キリシタンとして名をなすも、やがては教会からも出奔し、ついには無宗教を標榜するようになる。ハビアンのこの変化は、キリスト者からすれば「転向」ということになり、不評である。ハビアンが転向した理由をキリスト者は「信仰の浅薄」と考えるようである。しかし、ハビアンの転向の理由を「信仰の浅薄」と捉えるのは、一神教的な価値観ではないだろうか。一神教のキリスト教では、宗教的な成熟とは、絶対神の基準による正・邪、善・悪の中軸を自己の内部に作り、それを確かなものにしてゆくことである。釈(2009)によれば「キリスト教国では、明確な取捨選択が行われ中核が確立できたものを、宗教的に成熟した人格とする風潮がある」とのことである。

そのような形態を宗教的成熟とすれば、不干斎ハビアンとは、絶対的中軸が定まらない、従って、神への信仰が浅薄な人物であるという評価となるであろう。しかし、ハビアンが禅、キリスト教、無宗教と変化したプロセスを、釈(2009)は、「一回一回その宗教の体系をたどり、体験を通してリアルに会得した言葉で語っている」と述べているように、ハビアンとは、浅薄な態度でふらふらと目移りして、禅やキリスト教に帰依しやがてはそれも捨てていった人であるように感じられない。むしろ、ハビアンとは真摯な態度で宗教体験を重ね、それをリアルな言葉で表現したプロセスの結果として、ついに無宗教になった人のように感じられるのである。それはまさに体験過程が促進されたということではないだろうか。その結果、それぞれの宗教の思想や価値は、そのどれもがハビアンの中に価値を持つものとして位置づけられ、ゆえに、どんな思想もハビアンにとっては絶対軸とはならず、相対化されていったということではないだろうか。中軸を作ることを成長と考える一神教文化では、ハビアンの変化は成長とは見なされないであろう。しかし、それぞれの宗教

思想を価値あるものとして認め、自己の中に位置づけてゆき、結局のところ中軸は確立できないこのプロセスは、多神教文化の日本にあっては成長と見なされうるものではないだろうか。様々な価値が相対化され、バランスが保たれ、全体が形成されているというようなハビアンの様相は、これも部分と全体の一つの関係性であるとも言える。その際の全体性のまともは、中軸を持つことによってではなく、個々の要素(価値、宗教)のバランスを取ることによって保たれているのである。

【個人と集団の良い関係】

さて、ここまで述べてきた古武道の身体操作と不干斎ハビアンに共通することは、なんだろう。それは、全体性を保つ際に中軸を作ることによって、部分を全体に統合するという方略を取らないということである。中軸を作らずに、部分を統合して全体性を保つことは、不安定であり、全体性は容易に崩壊するように感じられるかもしれない。しかし、古武道やハビアンはただ、中軸を作らないだけではないところが、もう一つのポイントである。中軸を作らないが、しかし全体性を保つ方略は取られているのである。だから、全体性は容易には崩壊しないのである。

それは、「①個々の部分は、全体からはある程度独立して自律していること。」しかしながら、「②個々の部分同士は、ある程度お互いに関わり合っていること。」その上で、「③個々の部分がバランスを取ることで、全体性が保たれていること。」の3つの様相を持つことによって、部分の集合体が全体を形作っているのである。そして、このような形態で全体性を保つに至るプロセスとして、どちらも、体験過程の促進が見られる。古武道の身体操作を身につけるための型稽古における、今、ここの意識の持ち方、不干斎ハビアンが、禅やキリスト教を自ら体験し、その体験をリアルな言葉で語ったこと、このようなプロセスを通して、部分は中

軸を持たずとも全体の中に位置づけられたのである。

以上の共通性を参考に、個人と集団の関係を考えたとき、「滅私奉公」でもなく「滅公奉私」でもない、良い関係が見えてくるのではないだろうか。つまり、自立した多彩な個人が、緩やかに繋がるという方略により集団を保つという関係である。絶対的な中軸を作って、集団を保つ方略を取れば、緩やかさに欠ける「滅私奉公」的な集団となるだろう。そこには、自立した多彩な個人は存在すべくもない。また、ただ自立した個人が存在するだけでは、その個々はバラバラであり、集団は保たれない。つまり、上述したキーワードの「自立した」「多彩な」「個人」「緩やかに繋がる」のどれが欠けても、個人と集団の良い関係の構築は困難となる。

また、自立した個人とはいかなる存在か、を吟味しておくことも非常に大切である。自己実現とは、単にわがままを通すことでは決してないはずである。古武道の身体操作や不干斎ハビアンが、その全体性を保つために体験過程の促進を必要としたように、自立した個人となるためには、自己と集団の関係を常に内省し、問いつける態度が必要となるのではないだろうか。従って、自己実現の概念を検討し自立した個人とは何かを、提示する必要があるのではないだろうか。

そして、自立した多彩な個人が緩やかに繋がった集団、これこそが、21世紀に目指すべき、個人と集団の良い関係のように思われる。

文 献

- 網野善彦(1996)『増補 無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和—』平凡社ライブラリー。
- 黒田鉄山(2000)『気剣体一致の「改」』BAB ジャパン社。
- 摩文仁賢榮(2001)『武道空手への招待』三交社。
- 森田洋司・清水賢二(1994)『新訂版いじめ—教室の病—』金子書房。
- 釈徹宗(2009)『不干斎ハビアン—神も仏も捨てた宗教者—』新潮選書。